麻主

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: あせごの, まん メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4912

創作

麻主

「ただいまー」

返事はない。いつものこと。ママはお店で忙しい。小さな喫茶店を別府さんというチーフと二人で切り盛りしている。

桃子は階段をギシギシと軋ませて上った。今日はいつもより軋み音が耳につく。以前からこんな大きな音だったっけ？　最後の段に足をかけると、床板は溜まった不満に耐えかねたようにパシッと乾いた悲鳴を上げた。

桃子はヒッと唾を飲み込んだ。足がすくんだ。大きな音を立てるとママに叱られる。あれは幼稚園の頃だった。ミエちゃんと二人、二階の廊下で小さなスーパーボールを転がして遊んだ。強い弾力のボールは二人の頭より高く跳ね、壁に当たって方向を変え、あちらこちらと飛び回った。しばらくするとママが階段をドスンドスンと足音高く上がってきて叫んだ。

「いい加減にしなさい！　下にものすごく響くのよ！」

ミエちゃんは今にも泣きそうな顔して、大慌てで帰って行った。

あせごのまん

それ以来桃子の家には遊びに来たことがない。

部屋に入りカバンを置こうとして困った。勉強机の上にコタツの天板が乗っている。ママの意図は何だろう。気をつけなくちゃ。

いつもママは言う。人の行動には意味があるのよ。頭を働かせなさい。何の意味もないことをする人間を、世間はバカと呼ぶのよ。

だとすると、勉強机の上に天板を乗せる意味は何なのだろう。よく見ると、天板の表面を薄くホコリが覆っていた。

ああそうか。ママは忙しいから拭いておけということだ。

畳の上にカバンをおいた。戸の隙間から吹き込んだ風のせいで、ホコリの塊がコロコロと転がって部屋の隅で渦を巻いた。

ああ、ケサランパサランが暴れている。

ケサランパサランって何？　ママはよく言うけれど、ただのホコリとどう違うの？

「あなた女の子でしょ！　自分の部屋くらい自分でお掃除しなさい！　お母さんは忙しいんだから！　ケサランパサランが暴れ回るような

部屋にいたんじゃ、男の子に見向きもされないわよ！」
ママの声が耳元で聞こえるようだ。
今朝出て行ったばかりなのに、部屋はまるで何年もの間使っていなかったような違和感があった。
洋服ダンスの前に、古新聞の束ねた山が二つ居座っている。桃子が学校に行っている間に、ママが運び込んだにちがいない。押入の前にはコタツが立てかけてあった。桃子の机の上を占拠している天板は、もちろんその相棒だ。
嫌がらせじゃないことくらいわかっているけど、時々ママはそんなふうな、桃子に理解できないことをする。たぶん試されているのかなと思う。ちゃんと自分でするべきことができるのかどうか。
桃子は階段を降りた。洗面所の扉を開けると、床に何枚もの古雑巾が乱雑に放り出してあった。中には絞った形のままに捻れてカリカリに乾燥してしまっているものもある。灰色の巨大なイモ虫みたいだ。ジッと見ていたが、どこかへ這っていく気配はなかった。
桃子は頭を巡らせる。広げたままの雑巾は果たして洗った後に広げられたのか、それとも洗わないまま放り出されたのか。もう一度目を凝らしたが、どこれもこれも似たり寄ったりの汚さで見ただけではわからない。だが、確実なことが一つある。一度も洗わないまま汚れた雑巾を絞るなんてことは、普通はしない。だからイモ虫っぽい雑巾は洗ってあるということだ。灰色のそれを桃子は拾い上げた。
何だろう、この手応え。スポンジ？　軽石？　雑巾らしくないスカスカした布の塊感。
陶器の洗面台の角にコツンと当ててみた。布とは思えない乾いた音が面白かった。コツンコツンコツンと何度も洗面台の角を雑巾が叩いた。金属やプラスチックとは違う手応えが掌に気持ちいい。
おっと、楽しんでいる場合じゃなかった。
ジャッと水を浴びた途端、漲っていたパワーが流れ去ってしまったかのように、雑巾はただのグンニャリした薄汚い布に変身した。
天板を拭き終えて古新聞の山もコタツもまとめて全部廊下に運び出し、洗面所の奥の納戸から掃除機を引っ張り出してきた。音ばかりがやたらと大きい掃除機がホコリの塊を吸い込んでいく。桃子は逃げ惑う人々を飲み込む巨大な怪獣になった気分で、人類全滅後の世界を思い描いてみたりした。
「ちょっと！」
不意に耳元で呼びかけられて、桃子は心臓が止まりそうになった。出たな、正義の味方！
怪獣って心臓に良くないね！　たかが人類を襲うだけなのに、こんなに怯えなきゃいけないなんて。
振り向くとママが立っていた。戸惑ったようなその顔はいつもより少しばかり年取って見えた。
「桃ちゃん、どうしたのよ？」
「お掃除してるの。きれいになったでしょ？」
ママはマジマジと桃子の顔を見た。「そんなことじゃなくて……」

「寄り道なんかしなかったわよ。ちゃんと真っ直ぐ帰って来たもの」
「桃ちゃん、あなた……」ママは畳の上に転がったカバンに目をやり、また桃子の顔に視線を戻した。
「ママー」階下から別府さんの声。「サンゼンさんが来てますよー」
眼鏡をかけたおしぼり屋のおじさんだ。桃子ちゃんかわいいね、といっつも愛想はいいけれど、半袖の裾から青黒い龍の尻尾がのぞいている。
「はーい、すぐ行きまーす」ママはそう返しておいて、「どこにも行かずに居なさいよ」と言いおき階段を下りていった。
「どこ行くっていうのよ、いったい。あーあ、何かイヤだな。家出しちゃおうかな……」
納戸へ掃除機を戻しに行って、ギョッとした。薄暗い納戸の床に足跡がくっきりとついている。まるで絨毯を敷き詰めたみたいに堆積したホコリ。そこに黒々と大きな足跡が残されていた。
小学六年生の桃子の足はそんなに大きくはない。さっき掃除機を取りに入った時には気づかなかったけど……あ、そうか、ママだ。掃除機の音を聞きつけて、先に納戸を覗いたにちがいない。
ヤダ、ママったらホコリまみれの足のままお店に下りて行っちゃったのね。
元あった場所――そこにもぽっかりと跡が残っていた――に掃除機を戻すと、何かがカサカサと音を立てて奥の暗がりへ移動していった。食べ物を扱う商売にゴキブリやネズミはつきもので、桃子は今さらそんなものを珍しがったり恐れたりすることもなかった。
桃子の部屋の天井裏では、コロコロと軽い球を転がすような音や、時にはドタドタともっと体重のある何かが駆け回るような音をしばしば耳にする。球を転がすような音は小型のネズミが走る足音だと別府さんが言っていたけど、桃子はネズミが小さな球を転がして遊んでいる様をいつも思い描いた。

＊

どこかでカサカサと音がした。闇の中に何かがいる。ゴキブリではなかった。もっと大きくて細い。
カマキリだった。茶色の。保護色のつもりだろうか。黄ばんだ畳と同じような色。桃子に向かって小さな鎌を振り上げる。
生意気に……桃子は傍らにあったチラシを丸めて叩いた。潰れた腹から、黒くて細い針金が出てきた。そいつは下手なコンピュータグラフィックで作成したように、カクカクと奇妙な動きでのたうった。
ハリガネムシ。男の子たちから教わった。カマキリの尻から出てきたあれが指に巻きつくと、指が腐って落ちてしまうと。
何とかしなきゃ。丸めたチラシの先っぽに引っかけて、ゴミ箱の中にでも放り込もう。
不意にハリガネムシが立ち上がった。
棒？
座敷の真ん中にすうっと伸びた。もうカクカクの動きは見せなかっ

た。棒は桃子の背丈よりも高くなった。
そうしてジリジリと桃子の方へにじり寄ってきた。桃子は身動きできなかった。棒は真っ黒でつや消しのようでありながら、鈍い光沢を放っている。
足元から奇妙な陶酔感が這い上がってきた。ああ今にもあたしは襲われる……桃子は身をよじった。内股をきつく閉じる。両腿と下着に挟まれた部分が敏感になっている。う、うぐ……食いしばった歯の間から、呻き声が漏れた。いや、やめてやめて……必死で棒を押し返した。
黒く冷たい棒は思いがけない固さで指先に当たり、そこで桃子は不意に目が覚めた。掌が押したのは部屋の隅に置かれたロッキングチェアの脚だった。
桃子の夢など知らぬ顔で、チェアはふらりふらりと前後に揺れた。
「桃ちゃん、今日はどうするつもり?」
焦げだらけのトースター（というより、桃子的には魚焼き器だと思う）から引っ張り出した食パンを皿に載せながらママが訊いた。
「今から? もちろん学校に行くわよ」
トーストにマーガリンと蜂蜜を塗ってほおばった。甘さとともにフッとお魚のにおい。ママはパンもサンマも同じ器械で焼いてしまうから、いろんなものが不味くなる。一口で二度美味しい、なんてテレビCMのようなことはおこらず、一口で二度不味い。慌てて甘ーいミルクを飲んで、魚のにおいを喉の奥へと押し流した。
「そんなガツガツと飢えた子供みたいに……」
（うざいな、ババア!）
あ、サクラちゃんの口癖、うつっちゃった。あぶないあぶない、もう少しで口から飛び出すところ。
やだなー、ママったら眉間にシワ寄せて、まるで般若みたい。そんな顔してたんじゃ、そりゃあっという間に年取っちゃうわ。
「わっ! もうこんな時間じゃん! ママ、どうしてもっと早く起こしてくれないのよ!」
「だって、桃ちゃん……」
のんびりと親子の会話なんて交わしてる場合じゃない。桃子は残りのトーストを口の中いっぱいに押し込み、椅子を蹴って立ち上がった。
ランドセルがうまく背負えない。小学校入学時に買ったもんだもの、桃子がそれだけ成長したってことだろう。慌てているからか、無理に背負おうとすると肩の関節が外れてしまいそうだ。仕方ない、抱えていこう。
「行ってきまーす!」
「ちょっと! 桃ちゃん!」
ホント、うるさいな。時間ないって言ってるじゃん!
ママの声に後足で砂をかけるような勢いで飛び出した。集合場所の公園まで全力で走っていったけれど、公園には誰もいなかった。
「そりゃそうだ、完全に遅刻だもん」

思わずブランコに座り込んだ。
あれ、ブランコってこんなに低かったっけ？　そう言えば、長らくブランコにも乗っていない。足で地面を蹴った。うわあ、膝すりそう。知らない間にこんなに成長してるんだな。
もうすぐ中学生だもんね。サクラちゃんはきっと不良になるわ。だって男の子におっぱい触らせたりしてるんだもん。ろくでもない男に騙されて不幸な人生歩むのかな。
ろくでもない男に……って、ママの口癖。これ、パパのことなのよね。
パパは桃子が幼い頃に亡くなった。動いているパパは、ＤＶＤの中でしか見たことがない。動画の中でパパは桃子を抱っこしたり三輪車を押したりしていた。
実物も見た記憶がないわけじゃない。ある日パパは女のことで麻雀の相手とケンカして、額にガラスの灰皿を叩きつけられ血だらけになって帰ってきた。大騒ぎで目が覚めた桃子の目に、鬼のようなパパの姿が焼きついている。生のパパといえば、その鬼の形相で玄関に突っ立つ姿だけ。それ以外は記憶にないから、生のパパは桃子の頭の中では、血みどろの鬼の姿のまま動かない。時々その鬼がパパだったのか、他の男の人なのかわからなくなる時があるけど、そんな時には男もパパも記憶の底深くへ押し込む。
まあそういうわけで、動くパパなんて芸能人みたいなもの。画面の中にしか存在しない。ＤＶＤで見る限りは、なかなかいい男。これが本当に芸能人だったら、ママも桃子も少しは自慢できたんだけどね、ろくでもない男であっても。
どうろくでもないのかっていうと、ママと桃子と借金を残して愛人の家で死んじゃった。しかも不細工な愛人宅で。どうしてこんな女って言いたくなるような女だったわ、とママはいつも嘆く。借金はその女のために使ったらしい。お酒のためにも使ったらしい。賭け麻雀にも使ったらしい。
ママ的には、腹が立つくらいに見事な、絵に描いたようなろくでもなしってことだ。
ってことで、ママが言うには、女を安く売ったりしてはいけないんだそうな。女を売るってよくわからないんだけれど、まあサクラちゃんみたいなことかな。いろんなヤツにおっぱい触らせてお金もらってるって噂を聞いた。
だけど、どんな男だったらいいんだろう？　早瀬保みたいなヤツはどうかしら？　桃子と同じ六年一組、背は高からず低からず、いつもぼんやりしてるけど、それがいい味出している。
桃子は早瀬との結婚生活を思い描いてみることがある。幸せな新婚生活。魚のにおいのしないトーストに香ばしい湯気のコーヒー。ソファに座って映画を見たり、ワインで乾杯したり。早瀬がグッと顔を寄せて優しくキスして、桃子を抱き寄せる。
早瀬が桃子の上に乗ってくる。あ、早瀬、ダメ、動かないで。やめて！　そんなにしないでったら！　なんで？　どうしてなの？　ジッとしといてよ。動かないでってば！
痛い！　早瀬にキスされた頬が、燃えるように傷む。

お願い、もう離れて。ほっぺが痛いの。我慢できない。あっちへ行ってよ！　男なんて、もうイヤ。棒でいいわ。ただの棒でいいのよ！　男なんて動かない棒でいいのよ！

頬の痛みに耐えかねて涙を流しながら、桃子はブランコに揺られていた。もたれかかった自分の頬が金属のチェーンと強くこすれて、血が滲んでいることにも気づかずに。

＊

「今日はアルバイトの子頼んだから、桃ちゃん、ちょっとつき合って」

「どこへ？」

「知り合いのところよ」

知り合いのところへ、ママはよく出かけていく。そりゃまあ世間に知り合いなんて山のようにいるんだから、全部回ろうと思うと、何日必要か見当もつかない。

桃子はただママの後をついて歩いていった。電車に何駅か乗って、ママの後にくっついて降り、薄汚れた商店街を通っていく。

何だろう、この商店街には独特のにおいが漂っている。引き千切られた野菜と古くなった天ぷら油と人の垢を溶かしたミルクのようなにおい。みんなお面のような笑顔で桃子らの方に唾を飛ばして、あれやこれやを売りつけようとする。でも、店と店の隙間には、今にも溶けて流れ出しそうな段ボールや野良猫の死骸や昨夜の残飯が犇めいていることを、桃子は知っている。

商店街は迷路のように曲がりくねって人の波が潮流のようにうねり、桃子はママについていくだけで精一杯。でも、ママは手すら繋いでくれない。

「桃ちゃん、早瀬くんと何かあった？」

え？　どういうこと？　どうしてそんなこと急に訊くの？

見透かされている？　どうして空想の世界のことを、ママは知ってるんだろう？　魔法？　そう、時々ママの言葉は魔法のように桃子を縛りつけた。

女の子らしくしなさい、朝ご飯を食べなさい、手を洗いなさい、神様は見ているわ、早く寝なさい、男なんかと遊んじゃダメ、押入に入ってなさい、かしこい女になりなさい、するべきことを先にしなさい、ろくでもない男にひっかかるんじゃない、いい子でいなさい、神様は何でも知っている、生きがいを見つけなさい、謝りなさい、お掃除しなさい、何だってお見通しだから……。

「ママ」桃子は足を止めた。「行きたくない」

「どうしたの、急に」

「水族館に行きたい」

「はあ？」眉の端がピンと跳ね上がった。「水族館なんていつでも行けるでしょ？」

いつでも行ける場所なのに、一度も連れて行ってもらった記憶はない。大人になって彼氏ができたら、水族館に連れて行ってもらえるだろうか。男の子と手をつないで、ゆったりと泳ぐジンベイザメ

やきれいな甲羅のタイマイを見てみたい。
「早くしなさい。待ってもらってるんだから。誰のためだと思ってるのよ」
桃子の足はママに逆らって水族館を目指すなんてことはせず、むしろ桃子の意思に逆らって前へ前へと歩み出した。

その家はすべてが気味悪かった。
玄関前にある自然木か人工か判然としない、奇妙なオブジェ。煤けたネズミ男が大きく口を開けて嗤っているように見える。玄関を入った三和土には、一面に短冊が散らばっていた。一枚一枚には細かい字でびっしりと何かが書きつけられている。神様の言葉かもしれない。桃子は足を踏み出すことができず突っ立ったままでいた。
「いいのよ、これで俗世の穢れを清められるんだから」ママはガシッと音立てて、三和土をパンプスの底で踏みつけた。
桃子はできるだけ短冊の隙間に足をおき、爪先立って上がり框にたどり着いた。お習字の下敷きに使うようなペラペラの真っ赤な毛氈がずぅーと廊下の奥まで敷かれている。目を凝らすと何かの動物の毛が一面にくっついていた。ママはあれだけお掃除しなさいと桃子に言うけれど、知り合いの人の家では口をつぐんでいるらしい。
どこを見ているのかよくわからない小さな女の人が、昔話に出てくるような着物を着て出てきて、上がってすぐの部屋へ導いた。畳の上にホットカーペットが敷かれていて、それにも大量の動物の毛がくっついている。部屋の隅に薄汚れた座布団が積み上げてあって、ママは勝手にそれを引っ張り出し、桃子の分とあわせて敷いた。
部屋は冷蔵庫にでも入ったように冷え冷えとしていて、桃子はブルブルと身体を震わせた。ホットカーペットは電源が入らないどころか、スイッチの根本部分からコンセントが引きちぎられていた。
「この身を切るような空気はどう？　桃ちゃん、浄化されると思わない？」
「寒い……」
「頭のてっぺんから爪先まで氷柱で貫かれるような心地よさ。これがわからないようじゃまだまだ子供だわ」
ママはこれもまた部屋の隅にボロ切れのごとく積み上げてあった毛布を引っ張り出し、桃子に投げて寄こした。
「これを被っておきなさい」
蚤が巣でもつくっていそうなボロ毛布は少しも暖かくなかった。頬から首筋にかけて何やらフワフワとくすぐるものがあって、桃子はてっきり蜘蛛が巣でも張ろうとしているのだと思い、その辺りを掌でぬぐってみると、指に長くて黒い髪の毛が絡みついてきた。
こうやって同じように毛布を被せられた女の子がいたんだわ。その子は何をやらかしたんだろう。早瀬みたいな男のことを妄想したんだろうか。
立てつけの悪い襖が背筋を爪で逆なでするような音を立てて開き、どこを見ているかわからない目で小さな女がママを呼んだ。
「ちょっと待っていなさい」
ママは言いおいて出て行き、その後ろで小さな女が桃子を振り向

いて黄色い歯を見せた。笑ったつもりらしい。
「死ね、チビ」桃子は小さく吐き捨てた。
「お前が死ね、ブス」
小さい女は眉間にシワを寄せ、目尻を尖らせた。目の奥が真っ黒になって、冷たい空気を部屋に送り込んできた。

部屋は怒りや悲しみを熟成させるには温度が低すぎた。桃子は今日学校を休んでしまったことを思い出し、先生への言い訳を考えた。髪の毛みたいな蜘蛛の巣で毛布が織られていました……なんて言って、わかってもらえるだろうか。この家の説明は難しい。
ギリギリギリ……どこを見ているのかわからない目で小さな女が背筋に爪を立てる……と思ったら、不意に髪の毛を引っ張られた。
「呼んでるんだよ、ブス」
小さい女の後について、赤くて長い廊下を歩いていく。ムッとする垢のにおいの満ちた部屋にママと変な生き物がいた。駱駝の顔と張り裂けそうな豚の腹。昔見たアメリカ映画にこんな異星人が混ざっていたはずだ。
「さあ、こっちへ」
びっくり！　変な生き物は日本語をしゃべった。わけのわからない言葉をママが通訳するのだとばかり思っていた。
「桃ちゃん、カミサマの前へ」
ははあ、これがカミサマ。だから何語でもしゃべるんだ。やっぱ宇宙から来たのよね。

変な生き物は黒い毛氈を膝の前に伸ばして敷いた。桃子は思わず訊いた。
「どこの星から来たんですか？」
「星？　ははあ……」
「失礼なこと訊くんじゃありません」
「占星術ではないのだ、お嬢さん。さあ寝て」
この毛氈にも動物の毛。でも、もうわかっている。この変な生き物の毛だということが。
ほんの短い距離を何光年も離れているかのように、変な生き物はノロリノロリと這ってきて、横たわった桃子の胸元にいきなり手をおいた。
「冷たい身体だ」
氷柱に貫かれそうな部屋にいたんだもの、当たり前だわ。
変な生き物の暖かくてブヨブヨした手が桃子の胸を這い回った。気持ちいいのか悪いのか、桃子には判断がつきかねた。きっとサクラちゃんみたいに不良になったらわかるんだ。
「お嬢さん、年はいくつかな？」
「それがもうね……」ママが勝手に答えている。「いい年になってるのにまあ……」
十二歳よ！　それっていい年なの？
「奥の部屋に何かがおるな」
「奥の部屋といいますと？　客間のことですか？」ママが訊いた。
「使っておらぬ部屋があるだろう？」

「はあ。今は客間と……それから……」
ママは何やらブツブツと呟き、変な生き物もブツブツと返した。
桃子の部屋を空き部屋みたいにしたのは誰よ？　ママじゃない。古新聞だの使わないコタツなど放り込んで。
「奥の部屋だな……黒い影が見える」
本当に見えてるの？　変な生き物のまぶたがピクピクと震え、時折ペロンとひっくり返って白目が薄く覗いた。
うわあ、何だろ、あの目。きも過ぎて返って視線を吸い寄せる。
「それは何か……その……悪いものであるとか？」
「古い霊だな。憑かれたのだろう」
変な生き物は目を開け、どこかから紙を取り出して墨で字を書いた。
「麻主」
「あそう、ですか？」
「麻生ではない。麻主だ」
「あさぬし？　何ですかそれは？　人の名前かしら？」
「知らぬ。麻主が取り憑いたのだ」

＊

「桃子！」
誰、このオッサン。どっかで見たような気もするんだけど。
「焦ったよ。何にも言わずいなくなってしまうんだから！」
「何の用事ですか？」
「そんな冷たい言い方するなよ。さ、帰ろう」
ガチャリと音がして、店の方からママが顔を覗かせた。
「早瀬くん！」
はあ？　早瀬って？　あ、言われてみれば、早瀬に似てるところもあるわ。やけに脂ぎってるけどね。
「ああ、お義母さん。すみません、桃子のヤツが……」
「早瀬くん、ちょっといいかしら？　お店の方へ」
なあに、あれ。まさかママの若い愛人？　やだ、気持ち悪い。
桃子はとっさに財布を掴んで家を飛び出した。

気がつくと薄汚い毛布を頭から引っ被っていた。
「今日は一人か、ブス」
小さい女が覗き込んだ。相変わらずどこを見ているかわからない。その目は人のものとは思えなかった。真っ黒の目から凍えるような寒気を送り込んでくる。
「死ね、チビ。話をするときは人の目を見て言え」
負けちゃいけないんだわ。
桃子が泣いて帰ってくると、ママはよく叱った。悔しい時に泣いたら負けよ。負け癖がついたらそれでお終い。パパみたいに負け続けて負け続けて、醜い女の尻の下で反吐を吐いて死ぬのよ。
「サッサと立て、クソ女」
小さい女が目の前まで来た。畳に座っている桃子の目線の高さに、

あっちこっちを向いている真っ黒な瞳があった。
「断りもなく寄ってくんじゃねえよ、チビ」
「股から腐った汁が滴っているぞ」
「どけよ」桃子は小さい女を押しのけた。
女は眉間に黒く深いシワを五本も刻んで、妖怪めいた口で何かを呟いた。
「日本語しゃべれ、カス女」
「鼓膜まで腐ってるな」小さい女が廊下を案内しながら吐き捨てた。
「呪われろ、低脳」桃子は小さい女の後ろ頭を睨みつける。
「死ね」女はまるで合い言葉のように言って襖を開けた。
桃子は変な生き物のいる部屋へ入った。今日はまた一段と駱駝めいていた。鼻の穴を広げて座椅子の肘掛けにもたれている。
「お一人？　お母さんは来なかったんだ？」
やっぱり、化け物としか思えない。きっとママの身体が目当てなんだわ。
「マッサージお願いします」
「マッサージ？　ははあ……まあ、そこへ寝て」
相変わらず部屋の中は垢じみたにおいと獣の毛が充満していて、桃子はこみ上げる吐き気を飲み込んだ。
「あんた、今十二歳かな？」
「はい」
「どうして十二歳なんだろう？」
バカじゃない？　十二年間生きてきたら十二歳になるに決まってんじゃん。
「十二歳にしては、よく育ってるようだがな」変な生き物は茶色の太い指先で桃子の胸を触った。「この乳房はもう男を知っている重みのようだが」
変な生き物は長々と桃子の乳房をもてあそんだ。
「どうだ？　こうして旦那はあんたの胸を触るじゃろ？」
旦那って……。
「さっき電話があったよ、お母さんから。旦那が迎えにきているそうじゃないか」
ママの愛人のことを言ってるの？
「しかし、このまま帰っても何も変わらないだろうな。原因は今あんたのいる古い家の亡霊だからな」
「麻主ってヤツですか？」
「それそれ。そいつは何者だ？」
「知りません」
「残念ながらワシにもわからん」
どうして駱駝に胸を触られながら、意味不明の会話をしているんだろう。
桃子は不意に立ち上がった。襖の隙間から小さい女の目が覗いていた。
桃子はサッと襖を引き明け、女の胸倉を思い切り蹴った。女は廊下に転がり柱の角に頭をぶつけて、ゲフッと茶色の液体を吹いた。ネバネバした気味の悪い吐瀉物が桃子の足にかかった。そのまま玄

関を走り出る。
「金払え、ババア」背後で小さい女が喚いた。

家では早瀬と名乗るママの愛人が待っていた。
「桃子、俺、今日は泊まっていこうと思うんだけど」
はあ？　なんで赤の他人のあんたが？　ってか、あたしに言う？
勝手にすればいいじゃん。
「寝るとこなんかないわよ」
「桃子の部屋でもどこででも……」
「やめてよ！」
ギョッとした顔で男が見上げた。その顔は……生活に疲れた早瀬保って感じだね。だからといって、あたしの部屋で寝る理由にはならない。
「桃ちゃん、あんた……」
（うぜえババアだな）
ああダメダメ、サクラちゃんになっちゃう。男に胸まで触らせちゃって。
「ママの部屋ででも寝たら。それ以上近づいたら許さないからね」
桃子が断固として拒否したため、早瀬を名乗るその男は結局客間に寝ることになった。
「あんなとこで？　あそこには麻主がいるわよ」
「あさぬし？　何だよそれ」
「亡霊よ。この家に古くから巣くうお化け」
「おいおい、何を言ってるんだ。今の時代に亡霊だなんて」
「頬をつねられるわ」
「え？」ママが桃子の顔を見た。
「知らないわよ、取り憑かれても」

＊

早瀬保は闇の中で目を開けた。何かの気配があった。布団の中で凍りついたように身を硬くして耳を澄ませた。指一本動かさず、いや動かせず、まるで金縛りにあったみたいだと自らを省みる余裕もない。ヒリヒリと髪の生え際が緊張感に引きつっている。
走り疲れた犬が吐くような息遣いが闇の中を漂っていた。
目の端に光るものを捉えた。スマホだ。それだけで緊張が少し和らいだ。早瀬は起き上がると、スマホを引き寄せた。乏しい灯りを気配のする方へ向けた。
髪を振り乱した女が真っ黒の化物ともつれ合っていた。取り戻しかけた平常心が吹っ飛んだ。早瀬は悲鳴を上げながら、布団を蹴立て襖を押し倒して廊下へ転がり出た。

桃子の母育枝は、突然闇を切り裂いた悲鳴とそれに続く激しい物音で目を覚ました。廊下に出てみると、早瀬保がオオトカゲのように這ってくる。
「何なの？」

「おば、お化け……」
桃子の部屋を覗いた。布団はもぬけの殻だった。
「ももこ！」倒れた襖を踏みつけ客間に駆けつける。
床の間の前で、ほとんど全裸となった桃子が黒檀の床柱にしがみつき、激しく腰を振っていた。
「桃子！　何やってるの！　やめなさい！」
「うぜえんだよ、ババア！」
「この売女！」激しい平手打ちをくれる。
「何すんだよ！」
「この汚らわしい売女め！　お前はあの父親の血を受け継いだ汚らわしい売女だ！」育枝は桃子のふくよかな頬を渾身の力を込めてつねりあげた。「汚らわしいことをするんじゃない！　押入に入って反省しろ！」
万力のような力で頬をつねりあげたまま引きずっていく。その瞬間、十二歳の桃子が三十歳の桃子と交錯した。
「やめてよ、ママ！　あたしいつまでも子供じゃないわ！　保！　こんなところで何やってんのよ！　家に帰るわよ！」
桃子は育枝の手をふりほどくとそう言い捨て、後ろも見ずに玄関から飛び出した。
その後ろ姿を見ながら、育枝はカミサマのお告げの意味を不意に悟った。
あの紙に書きつけられた「麻主」は、実は「木」の位置が本来の場所からずれてまだれの下に入ってしまい、「床柱」であるはずが「麻主」となってしまったのだということに。そして、それこそが桃子の亡霊の正体であったのだということに。

了